

講演会、研究会記録

題 目 文学部スペシャル・レクチャーズ

2019年4月に英米文学科が英語英米文学科に改称し、2020年度からは新カリキュラムが実施され、日本語教員養成コースと芸術文化行政コースが新設されるのを記念し、文学部では2018年7月から11月にかけて連続講演「文学部スペシャル・レクチャーズ」を開催した。

(1) 英語教育レクチャーズ「いま、あらためて考える英語教育」

日 時：2018年7月7日（土） 14:30～17:00

場 所：4号館ホール

登壇者：阿部 公彦（東京大学文学部教授）

静 哲人（大東文化大学外国語学部教授）

内 容：第1部では阿部氏が「なぜ私たちの英語は『失敗』するのか？」というタイトルで講演をおこなった。阿部氏の専門は英米文学研究だが、近年は『史上最悪の英語政策——ウソだらけの「4技能」看板』（ひつじ書房）の出版やTwitterでの発言を通じ、日本における英語教育の現状に警鐘を鳴らし続けている。講演では英語教育における「4技能主義」を批判的に検討する視点が提供された。

第2部は静氏による「英語の歌で発音が良くなるって本当ですか？～グルグル・メソッドで歌わせる授業の理念と実践～」というタイトルの講演だった。大教室での限られた授業時間の中で、英語学習において重要な「音節の感覚」を個々の学生に効率的に理解させるために考案されたのが「グルグル・メソッド」である。指導者が文字どおり教室をぐるぐると回りながら学生一人につき5秒ほどの指導を施していく授業の様子を映像で紹介しながら、メソッドの背後にある理論と実践上の注意点などが語られた。

当日は英語教育関係者を中心に約230名が来場し、登壇者の話に熱心に耳を傾けた。

(2) レクチャー・コンサート「アンデス音楽の伝統と前衛」

日 時：2018年7月21日（土） 15:00～17:00

場 所：本館大講堂

登壇者：笹久保 伸（ギター）

イルマ・オスノ（歌）

細谷 広美（レクチャー）（文学部国際文化学科教授）

内 容：細谷氏によるレクチャー「アンデスの文化と音楽」に続き、笹久保氏とオスノ氏がアヤク

チヨの伝統曲など、計13曲を演奏した。

連日の猛暑の中、この日も気温は35度に達したが、会場には約300名の熱心な聴衆が集まった。レクチャーを通じてアンデス音楽の多様性とダイナミズムについて理解を深めるとともに、ギターの調べとケチュア語の歌に耳を傾け、演奏者の2人のトークから先住民の暮らしや激動のペルー現代史にも思いを馳せた。歌に合わせて全員で手拍子をとったり、休憩時間や終演後には直に民族楽器にふれたりするなど、暑さを忘れる楽しいひとときとなった。

なお、本イベントの開催にあたってはペルー大使館の後援を得た。

(3) 現代社会学科特別講義「吉祥寺で学ぶ／吉祥寺を学ぶ ～プロジェクト型授業『コミュニティ演習』の挑戦～」

日 時：2018年8月4日（土） 11:40～12:40

場 所：9号館102教室

登壇者：伊藤 昌亮（文学部現代社会学科教授）

渡邊 大輔（文学部現代社会学科准教授）

見城 武秀（文学部現代社会学科教授）

内 容：本特別講義では、現代社会学科のプロジェクト型授業「コミュニティ演習」の2015年度から2017年度までの授業概要（テーマはそれぞれ「1964年からみる吉祥寺」、「街についての記憶を記録へ」、「武蔵野市の互助・共助のしくみ」）と成果が渡邊氏と見城氏から報告された後、今年度前期におこなわれた授業（テーマは「表現を通じた共生－武蔵野アール・ブリュットに向けて」）について、伊藤氏と履修生たちによる詳細な報告がおこなわれた。

アール・ブリュットとは美術の専門教育を受けていない人、中でも、障がい者による芸術活動を指す。報告によれば、履修生たちは障害者の創作活動を支援するNPO法人「ペピータ」や2017年度から開催されている「武蔵野アール・ブリュット」関係者、そして武蔵野市職員への聞き取りなどを通じ、アール・ブリュットという言葉の意味とアール・ブリュットをめぐる活動の社会的意義についての考察を深めていった。

「障がいや障がい者に対する自分の視点や思考が無意識の内に偏っていたことに気づいた」、「これまで見逃していた街の中のさまざまなアートに目が向くようになった」など、授業を通じた自らの変化を語る履修生の実感のこもった言葉に、来場者から大きな拍手が寄せられた。

(4) 英米文学レクチャー「イギリス文学と精神分析、あるいはトラウマと戦争」

日 時：2018年8月4日（土） 13:00～14:00

場 所：9号館102教室

登壇者：遠藤 不比人（文学部英米文学科教授）

内 容：本講義ではまず、「トラウマ」の歴史について概観した。世界史上最初にこの概念が使用

されたのは、19世紀イギリスの鉄道事故に遭った人たちの心の状態を指す用語としてだった。このことから分かるのは、精神外傷とも訳されるこの概念が新しいテクノロジーと関係をもつこと、人の心はかつて経験したことのない衝撃に対して脆弱性をもつことである。ちなみに「トラウマ」とは、元はギリシア語で「傷」を意味する。

トラウマが大きな注目を浴び、精神医学の用語として定着したのは第一次大戦においてだった。戦場で心に深い衝撃を受けた兵士たちに特有の症状——体の震え、戦場での恐怖を悪夢として反復・経験してしまうことなど——が「戦争神経症」あるいは「シェルショック」と呼ばれ、同時代の精神医学では解決できない謎となった。この症状を戦後もっとも鋭く説明したのが、精神分析の創始者であるジークムント・フロイトである。フロイトは、人の心がそれまで経験したことがない苦痛に出会うと、その経験を忘却するどころか、それを何度も悪夢の中などで経験してしまうことを「反復強迫」と呼び、この症状を理論化した。

この症状は、兵士の悪夢だけでなく、同時代のイギリス文学の言語においても反復された。世界最初の総力戦は、人類がそれまで経験したことがない、言語で表現できない衝撃として、同時代の文学においてトラウマとして反復され、その言葉を——兵士の心のように——破壊していった。この戦争において使用された最新のテクノロジーの破壊性が、人の心と言葉を破壊していった様子を、パワーポイントやYouTubeなどの映像資料を使用しながら解説するレクチャーとなった。

(5) 人文叢書レクチャー「チョコレートとコーヒーの秘密」

日 時：2018年8月5日（日） 11:40～12:25

場 所：9号館102教室

登壇者：小林 盾（文学部現代社会学科教授）

竹内 敬子（文学部国際文化学科教授）

佐々木 紳（文学部国際文化学科准教授）

内 容：本レクチャーでは、成蹊大学人文叢書第15巻『嗜好品の謎、嗜好品の魅力』をもとに、2つの章を紹介した。人文叢書は、文学部の教育・研究成果を社会に発信するための書籍シリーズである。すでに15巻まで刊行されており、今回は最新刊が紹介された。

小林氏による趣旨説明のあと、竹内氏から「チョコレートの秘密」について、佐々木氏から「コーヒーの秘密」について講演が行なわれた。

当日は、受験生や一般の方々およそ70名が参加し、熱心に聞き入っていた。豊富な体験談を聞き、また写真を見ながら、「謎解きの世界旅行」のひとつときを楽しんでいたようだった。受付にはトルコのコーヒー・セットが展示された。

(6) 英米文学レクチャー「アメリカ文学研究をトランスアメリカにひらく」

日 時：2018年8月5日（日） 13:00～14:00

場 所：9号館 102 教室

登壇者：庄司 宏子（文学部英米文学科教授）

内 容：本レクチャーでは、南北戦争以前（アンテベラム期）の19世紀アメリカ合衆国において、南部奴隷州から北部自由州、さらに英領植民地カナダへと逃亡する奴隷を援助する秘密組織であった「地下鉄道」（the Underground Railroad）について、人種の分断に揺れる現代アメリカにおいて関心が再熱していること、そして19世紀の「地下鉄道」に関して新たなアプローチによる研究が進み、それに連動して「地下鉄道」をテーマとするテレビドラマや現代小説が生み出されていることが紹介された。

神話化されたアンテベラム期の「地下鉄道」の見方が修正されつつあり、カリブ海からカナダへと西半球世界に広がる「海の地下鉄道」ともいべき反奴隷制度のネットワークが浮上するなど、「地下鉄道」をめぐるダイナミックに展開するアメリカ文学研究の現状と、文学がもつ国境を越える視点から、社会を批評し歴史を修正する力についてのミニ講義となった。

(7) レクチャー・コンサート「ミュージカルからジャズのスタンダードへ～舞台芸術がジャズの形成に及ぼした影響～」

日 時：2018年11月3日（土） 13:00～14:00

場 所：6号館 301 教室

登壇者：サマンサ・ランダオ（ヴォーカル、レクチャー）（昭和女子大学人間文化学部専任講師）

バーナビー・ラルフ（ギター、レクチャー）（文学部英米文学科准教授）

日比野 啓（司会）（文学部英米文学科教授）

内 容：ミュージカルもジャズも1920年代に人気を確立し、1930年代以降、ミュージカル・ナンバーはジャズの名曲として定番化していった。ジャズ・ミュージシャンたちはミュージカル・ナンバーを「スイング」させ、人々はそれに合わせて踊ったのだ。1940年代以降ジャズの中心が器楽曲に移っても、ミュージカル・ナンバーはコールアンドレスポンスや即興などの技法を取り入れながら、ビバップやハード・バップなどの新しいジャズ様式に取り入れられていった。ジャズはミュージカル・ナンバーを取り入れることで大衆の人気を得、ミュージカルもジャズとの出会いによって変わっていったのである。「枯葉」「サマータイム」「私のお気に入り」等の名曲をギターの伴奏で歌いながら、ミュージカルとジャズが相互に影響を与えた歴史が解説された。

※なお、7月28日（土）に予定されていた「江戸漢詩への誘い」（揖斐 高 名誉教授（日本学士院会員）による講演会）は台風12号の影響により、8月26日（日）に予定されていた「Ronald W. Langacker 教授講演会」は講演者のやむを得ない事情により、それぞれ中止となった。